

契丹小字文献中の漢語音からみた漢語喉音韻尾(上)

大竹昌巳

1 はじめに

遼・金代に中国北方で使用された契丹小字は、現在までに石刻文を中心に40点以上の資料が発見されているが、その文献中には、官名、称号、人名、地名等、多量の漢語系の語彙が含まれている。1970年代には、まさにそのような語彙の同定を契機として契丹小字の実質的な解読の門戸が開かれた⁽¹⁾。

これらの語彙が契丹語・契丹小字の解明に役立つばかりでなく、漢語音韻史にとっても貴重な資料となりうることは今更言を俟たない。近年の資料の増加もあって、契丹小字文献に基づく遼代の漢語北方方言の音韻特徴はある程度まで把握されるようになった⁽²⁾が、まだ十分に捉えられていない部分も多々ある。

本小稿では漢語の喉音韻尾について、従来の仮説に触れた後、契丹小字文献中の漢語音から何が言えるのかを述べる。

2 漢語通撰・江撰の韻尾について

2.1 「唇化軟口蓋音」仮説

いわゆる「十六撰」のうち通撰・江撰・宕撰・梗撰・曾撰に属する諸韻は、現代北京語では中古入声字を除いていずれも喉音韻尾 /-ŋ/ をもつ。

これら諸韻が上古音において、韻尾の種類に応じて2類に区別されるべきと説いたのは頼1953が最初である。頼1953は従来の喉音韻尾 -ŋ, -k (および濁子音韻尾 -g) のほかに、「唇音化された喉音 (labio-velars) -gw, -kw, -ŋw」の系列を推定し⁽³⁾、それによって従来より整然とした体系を提示することに成功している。

また頼1953は、「一般には中古の喉音韻尾に -k, -ŋ だけしか考えられていないが、中古にも -qw, -nw, -k, -ŋ があ」ったとすれば、韻尾の同じ韻をまとめて排列する傾向の強い切韻系韻書の多くが通撰・江撰の諸韻を一つにまとめて先頭に、宕撰・梗撰・曾撰の諸韻をそれらとは離して中間に置くことについて、「韻書は -qw, -nw を前に

(1) 契丹文字研究小組 1977, 1978, 1985.

(2) 沈鍾偉 2006, Shen 2007 など.

(3) ただし、「あるいは口蓋垂音 (uvulars) -g, -q, -ŋ であるかもしれない」と述べ、暫定的に「-gw, -qw, -nw」と表記している。

し、-k, -ŋ を後にしたものとする」ことができる」と述べている。

ところで、当時の中古再構音においては /ɔ/ (Karlgren の表記では \hat{a}) が認められていたが、この主母音を含むのは江韻⁽⁴⁾の韻母 /-ɔŋ/ (-ɔk/) のみであった。三根谷 1956 は頼 1953 の仮説 [-k \hat{w}] [-ŋ \hat{w}] とヴェトナム語の二重調音子音 [-kp] [-ŋ \hat{m}] を参考に、江韻の韻母の音価を [-ɔŋ \hat{w}] あるいは [-ɔŋ \hat{m}] と推定し、これを音韻論的に /-auŋ/ と解釈した。また、同様にあきまの多い /o/ を主母音とする東・冬・鍾および侯・尤・模・魚・虞の諸韻⁽⁵⁾を /-ɔuŋ, -iɔuŋ/, /-ɔuŋ/, /-iɔuŋ/, /-ɔu/, /-iɔu/, /-uɔ/, /-iɔ/, /-iuɔ/ と解釈することにより、従来より均齊のとれた（あきまの少ない）体系を提示した⁽⁶⁾。

平山 1967b は三根谷 1956 の仮説を承け、中古音の通撰・江撰諸韻母の音価を次のように推定している（相配する入声韻母は省略）⁽⁷⁾。

撰	韻母	音韻解釈	音価	参考：Karlgren 1954
通	東韻一等	/-ɔuŋ/	-ɔuŋ	(-ung [-uŋ])
	東韻三等	/-iɔuŋ/	-iɔuŋ	(-i \check{u} ung [-i \check{u} ŋ])
	冬韻一等	/-ɔuŋ/	-oŋ	(-uong [-uoŋ])
	鍾韻三等	/-iɔuŋ/	-ioŋ	(-i \check{w} ong [-i \check{w} oŋ])
江	江韻二等	/-auŋ/	-auŋ	(-ang [-ɔŋ])

平山 1967b が東韻三等を -iɔuŋ と推定する根拠は、敦煌出土『毛詩音』残卷反切で

⁽⁴⁾ 以下、上去声韻は相配する平声韻で代表させる。入声韻についても、文脈によって相配する平声韻で代表させている場合がある。ここでは「江韻」は江・講・絳・覺韻を含む。

⁽⁵⁾ この音韻論的解釈は藤堂 1954 に拠るもので、Karlgren 1954 は侯・尤韻の推定音価を -əu, -iəu としている。

⁽⁶⁾ 三根谷 1956 は江韻韻母 [-ɔŋ \hat{w}] を音韻論的に解釈する際、/-aŋ \hat{w} / では「余りに推定される音価から離れる」ためにそれを排して /auŋ/ という解釈を採った。これから明らかのように、三根谷 1956 は /-uŋ/ という表記を /-ŋ \hat{w} / (= /-ŋ \hat{w} /) とは別のものとして扱っている。では、/-uŋ/ とはどのようなものか。三根谷 1956 は「/-u-/ によって前の母音および後の子音の円唇性を示す」としか説明していない。この /-u-/ は /-ŋ/ とは独立の分節音素として認めているのであろうか。もしそうであれば、/-Vuŋ/ という音素連続以外にも /-Vuŋ/ という、実在はしないが可能な音素連続が生じるから、三根谷 1956 の趣旨とは反して多くのあきまが新たに生じてしまわないか。仮に /-uŋ/ を一つの音素の便宜的表記だとしても、この /-uŋ/ には前の母音を円唇化する働きがあり、/-ŋ \hat{w} / にはそれが無いとする根拠は何なのであろうか。筆者にはこの /-uŋ/ という表記が具体的に何を意味するのか理解できない。

⁽⁷⁾ 以下の音韻解釈は、重紐の対立を声母が担うとした場合のものである。

東韻三等字を歸字とする反切の上字に原則として開口の字を用いること⁽⁸⁾、『韻鏡』が第一転（東韻一・三等）を「開」とすること⁽⁹⁾、『慧琳音義』反切で屋韻（東韻入声）三等字を歸字とする反切の上字に尤韻字 $-i\ddot{a}u$ が多く用いられること⁽¹⁰⁾である。加えて、東屋韻三等 $-i\ddot{a}u\eta$, $-i\ddot{a}uk$ と尤韻 $-i\ddot{a}u$ のみに共通の音変化があること⁽¹¹⁾は両者が類似の条件を備えていたことを示している。

ところで平山 1967b は三根谷 1956 の仮定した $/-u\eta$, $-uk/$ を表記上は継承しているが、おそらくその考え方は異なり、頼 1953 に立ち返ってこれを円唇化軟口蓋音 $/-\eta^w$, $-k^w/$ と考えているようである⁽¹²⁾。

ふつう onset にある円唇化子音は、その出わり (off-glide) における唇の丸めが非円唇化子音との差異をもたらすが、coda にある内破音の場合は——off-glide がない以上——、その入りわり (on-glide) における唇の丸めが非円唇化子音との弁別を担う重要な要素となるであろう。したがって、例えば東屋韻三等 $/-i\ddot{a}\eta^w$, $-i\ddot{a}k^w/$ であれば、 $[-i\ddot{a}\eta^w]$, $[-i\ddot{a}k^w]$ のように主母音と韻尾の間に円唇のわたり音が聞かれるように実現されたと思われる⁽¹³⁾。

ただ、この仮説は外国借音や音写資料による裏付けがあるわけではない⁽¹⁴⁾。もしこのような円唇のわたり音を明確に記録した資料が存在すれば、この仮説はより説得力を得るであろう。

(8) 敦煌出土『毛詩音』残巻の反切上字は、歸字とその声母が一致するだけでなく、その開合・直拗・重紐 AB 類・主母音のグループまでもが一致するのを原則とする [平山 1966]。

(9) 宋代の『皇極經世書』声音唱和図も中古東韻の「宮・孔・衆」や屋韻の「六」を「關」（「開」に相当）の位置に置く [平山 1993]。

(10) 慧琳撰『一切経音義』の反切上字は、歸字との間に声母だけでなく開合・直拗・重紐 AB 類・主母音の一致が見られる例が多く、その中でもさらに韻尾の種類も一致または類似する例が多い [河野 1955]。

(11) 大部分の方言でこれらの韻の明母字（「瞢・夢」「目・牧」「謀・牟」等）には例外的に軽唇音化が生じず、直音化のみが生じた [河野 1954, 平山 1967a]。

(12) 平山 2005 で $/-u\eta$, $-uk/$ を $/-w\eta$, $-wk/$ と書き改め、「ここでの w は円唇化という弁別素性を表わしているにすぎず、独立の音素というわけではない」（這裡的 w 不過表示唇化的區別特徵，並不是独立的音位）と述べている。つまり IPA に則して書けば η^w であろう。

(13) 実際には唇の丸めは先行する非円唇母音の持続部の途中からすでに始まっており、主母音が非円唇母音から円唇母音へと移行していくような形をとるであろう。これを非母語話者が聞いて単純な円唇母音と受け取ることは十分にありうる。

(14) 現代の諸言語・諸方言に関して言えば、福州方言のように通撰・江撰に $-Vu\eta$, $-Vy\eta$ が対応する方言がある。ただしこの方言では宕撰一等も江撰と合流して $-Vu\eta$ となっている（『漢語方音字彙』（第二版）による）。

2.2 契丹小字文献における表記

ここでは興味深い幾例かについて見てみよう⁽¹⁵⁾.

- (1) 朶土火 九同朶 劣火 友 【図古辞 9】
中 京-gen. 同 知
- (2) 劣火 朶朶 朶土 止止 劣火 九 【義和 2】
充 本 州 防 禦 使
- (3) 伞勺 八关同 八丙火女 伞及 九丙火 九 【兀没 16】
積 慶 宮-gen. 副 宮 使
- (4) 伞关 八同 伞及 九丙火 九 【高十 15】
積 慶 副 宮 使
- (5) 安雨 伞同 百虫 伞及 八中 伞 【道宗 2】
銀 青 崇 禄 大 夫
- (6) 伞岑岑 八 及土司 伞伞女 九朶及 朶朶 【義和蓋】
(故) 太 叔 祖-gen. (哀) 冊
- (7) 主 八 及土 【敵烈 17】
皇 太 叔

(1) の 朶土火 <eč-eu-uŋ> /čeuŋ/⁽¹⁶⁾は漢語「中」〈知東開三平〉⁽¹⁷⁾を表記したもののだが、ここで注目すべきは字素 土 <eu> の存在である。この字素は、漢語流撰

⁽¹⁵⁾ 以下の挙例では契丹小字の字素 (grapheme) を横一列に並べ、各字 (graph) の間にはスペースを入れて表示する。実際には、字素は左上、右上、左下、右下、その左下…の順に並べられて字を構成し、字は縦書きされて行は左へ進む。

⁽¹⁶⁾ < >内には字素の音価を、/ /内にはそこから推定される語形を表示する (本稿における契丹語の母音の表記法については稿末の表を参照)。字素の音価や語形については方法論を含めコンセンサスが得られていない部分が多いが、ここでは本論に関連する部分を除いて、個々の音価推定の問題には立ち入らない。

⁽¹⁷⁾ 〈 〉内に当該字の切韻音系における声母・韻目・開合・四等・四声を示す。

(侯韻・尤韻)の韻母の表記に使用されるものである⁽¹⁸⁾。その音価は、はじめ契丹文字研究小組 1977 によって ou と推定されたが、この字素を含む語 土平 /eu/ が中世モンゴル語の e'üle(n) (WMo. egüle(n)) 「雲」の同源語であると考えられる [即実 1996: 282f] ため、<eu> とすべきである。管見の限りでは、この音価を最初に示したのは豊田 1991 である (豊田 1991 の表記では əu)。

(2) の 𠵹火 <čeu-uj> /čeu/ は「充」〈昌東開三平〉を表記したもののだが、字素 𠵹 <čeu> は単独で流撰字「醜」〈昌尤開三上〉の表記に使用される⁽¹⁹⁾。また、韻文中で 𠵹土 /čeu/, 丸 /meu/, 𠵹 /deu/ と脚韻を踏む (【宋魏 18-19】) ため、音価に eu が含まれることはまず間違いない [沈鍾偉 2009: 46f]。

(3), (4) の 𠵹火 <ek-ëu-uj> /këu/, 丸火 <eg-ëu-uj> /gëu/ は「宮」〈見東開三平〉を表記したもののだが、字素 𠵹 <ëu> は中古尤韻の韻母の表記に使用される字素である⁽²⁰⁾。

(5) の 𠵹土 <čau-uj> /čau/ は「崇」〈崇東開三平〉を表記したものであるが、字素 𠵹 <čau> は語 𠵹女 /čaur/ 「軍」(MMo. ča'ur) の表記にも使用される [即実 1996: 236, 261] ため、au を含んでいると考えられる⁽²¹⁾。

(6) の 𠵹土 <eš-eu-üg> /šeu/, (7) の 𠵹土 <eš-eu> /šeu/ はともに「叔」〈書屋開三入〉を表記したもので、前者は入声韻尾の保存された形式、後者は入声韻尾の脱落した形式である⁽²²⁾。字素 土 <eu> が流撰 (侯韻・尤韻) の韻母の表記に使用されることは前述した。

上に挙げた語形は、いずれも「非円唇母音+わたり音 -u- + 韻尾 -ŋ (-g)」という構造をもつ。そのいずれもが、中古東韻三等字を表記したものである。

もっとも、東韻三等字が常にこのように表記されるわけではない。

(8) 𠵹火 丸同𠵹 𠵹火 友 【敵烈 18】

中 京-gen. 同 知

⁽¹⁸⁾ 尤韻の表記に使用されるのは、頭子音が口蓋的な子音 (č-, j-, š-, y-) の場合に限る。

例：𠵹土 /leu/ 「婁」〈来侯開一平〉、𠵹土 /keu/ 「吼」〈曉侯開一上〉、
𠵹土 /šeu/ 「守」〈書尤開三上〉、𠵹土 /čeu/ 「州」〈章尤開三平〉。

⁽¹⁹⁾ 𠵹 公 丸 丸 𠵹 /čeu nū gē/ 「醜女哥」(人名) 【知微 19】

⁽²⁰⁾ 例：𠵹火 /lëu/ 「留」〈来尤開三平〉、丸火 /gëu/ 「丸」〈見尤開三上〉。

⁽²¹⁾ 「崇」が /čeu/ ではなく /čau/ と表記されるのは、原語の声母がそり舌音であることに何らかの要因があるものと推測される。

⁽²²⁾ 契丹小字文献においては、入声韻尾が消失してすでに舒声と合流していると考えられる表記と、明確に入声韻尾を保持している表記とが混在している。例えば、同一または類似の語においても、(3) の 𠵹火 /sig/ 「積」〈精昔開三入〉と (4) の 𠵹火 /si/ (同) のように両形式が見られる。

- (9) 主 丩 又 丩 傘 傘 【義和 4】
皇 太 叔 祖

(8) の 丩 火 <ǰu-uŋ> /ǰuŋ/ 「中」〈知東開三平〉と (1) の 朶 土 火 /čeuŋ/ (同) や、(9) の 又 丩 <eš-üg> /šüg/ 「叔」〈書屋開三入〉と (6) の 又 土 丩 /šeug/ (同) とを比較されたい。

また、ほかの通撰字も主母音自体が円唇母音であり、わたり音は見られない。例えば、(1) や (8) の 朶 火 <tu-uŋ> /tuŋ/ 「同」〈定東開一平〉、(5) の 朶 久 <el-ug> /lug/ 「禄」〈来屋開一入〉など。

江撰字に関しては宕撰字と表記し分けられない。

- (10) 傘 同 九 久 九 亦 傘 文 仂 凡 【斡特刺 11】
静 江 軍 節 度 使

- (11) 仂 久 九 久 傘 夾 久 …… 升 久 傘 少 仂 久 火 【宣懿 21】
独 孤 隋-dat./loc. 長 孫 唐-dat./loc.

(10) の 九 久 <eg-aŋ> /gaŋ/ 「江」〈見江開二平〉と (11) の 升 久 <ǰa-aŋ> /ǰaŋ/ 「長」〈知陽開三上〉、仂 久 <ta-aŋ> /taŋ/ 「唐」〈定唐開一平〉にはともに字素 久 <aŋ> が用いられる。

2.3 小結

以上に見たように、契丹小字文献において中古東韻三等字は、非円唇の主母音と韻尾との間にわたり音 -u- が介在する形で音写されることが多い。この音形は、唇化軟口蓋音韻尾仮説が推定する音形ときわめて類似する。

一方で、東韻三等字以外の通撰・江撰字ではこのような音写形式は認められない。しかし、東韻三等字のみがとりわけ特異なふるまいを見せるのは漢語内部の資料からも観察される現象であり、不自然なことではない。むしろ、漢語内部のデータが示す東屋韻三等と尤韻との親近性が、契丹小字文献においても示されることは興味深い。

(待続)

<本稿の契丹語表記法（母音）>

	前舌	中舌	後舌
狭	i ü	(i)	u
半狭	ë ö	e	ũ
半広	ä		o
広		a	

(a, ä, o, ũ は男性母音, それ以外は非男性母音である.)

<略号>

- MMo. 中世モンゴル語 (Middle Mongolian)
 WMo. モンゴル文語 (Written Mongolian)
 凶古辞 『蕭凶古辞墓誌銘』〔1068 年〕
 敵烈 『耶律敵烈墓誌』〔1092 年〕
 高十 『耶律(韓)高十墓誌』〔1076-1101 年の間〕
 道宗 『道宗皇帝哀冊』〔1101 年〕
 宣懿 『宣懿皇后哀冊』〔1101 年〕
 兀没 『耶律兀没墓誌』(『耶律副署墓誌』)〔1102 年〕
 幹特刺 『耶律幹特刺墓誌銘』(『許王墓誌銘』)〔1105 年〕
 知微 『蕭知微墓誌銘』(『梁国王墓誌銘』)〔1107 年〕
 義和 『義和仁寿皇太叔祖哀冊』〔1110 年〕
 宋魏 『宋魏国妃墓誌銘』〔1110 年〕

<参考文献>

【和文】

- 河野六郎, 1954, 「唐代長安音に於ける微母に就いて」『中国文化研究会会報』4(1) [河野 1979 再録]
 ———, 1955, 「慧琳衆經音義の反切の特色」『中国文化研究会会報』5(1) [河野 1979 再録]
 ———, 1979, 『河野六郎著作集 第2巻』平凡社
 藤堂明保, 1954, 「中国語の史的音韻論」『日本中国学会報』6
 平山久雄, 1966, 「敦煌毛詩音殘卷反切の研究(上)」『北海道大学文学部紀要』14(3)
 ———, 1967a, 「唐代音韻史に於ける輕唇音化の問題」『北海道大学文学部紀要』15(2)

- . 1967b. 「中古漢語の音韻」『中国文化叢書 1 言語』牛島徳次・香坂順一・藤堂明保〔編集〕, 大修館書店
- . 1993. 「邵雍『皇極經世声音唱和図』の音韻体系」『東洋文化研究所紀要』120
- 三根谷徹. 1956. 「中古漢語の韻母の体系 ——切韻の性格——」『言語研究』31 [『中古漢語と越南漢字音』(汲古書院, 1993年)再録]
- 頼 惟勤. 1953. 「上古中国語の喉音韻尾について」『お茶の水女子大学人文科学紀要』3 [『頼惟勤著作集 I 中国音韻論集』(汲古書院, 1989年)再録]

【中文】

- 北京大学中国語言文学系語言学教研室〔編〕. 1989. 『漢語方音字彙 (第二版)』北京: 文字改革出版社
- 平山久雄. 2005. 「隋唐音系裡的唇化舌根音韻尾和硬齶音韻尾」『平山久雄語言学論文集』北京: 商務印書館
- 即実. 1996. 『謎林問徑』瀋陽: 遼寧民族出版社
- 契丹文字研究小組 [清格爾泰、劉鳳翥、陳乃雄、于宝麟、邢弗里]. 1977. 「關於契丹小字研究」『内蒙古大学学报 (哲学社会科学版)』1977(4)
- 契丹文字研究小組 [清格爾泰、陳乃雄、邢弗里、劉鳳翥、于宝麟]. 1978. 「契丹小字解讀新探」『考古学報』1978(3)
- 契丹文字研究小組 [清格爾泰、劉鳳翥、陳乃雄、于宝麟、邢復礼]. 1985. 『契丹小字研究』北京: 中国社会科学出版社
- 沈鍾偉. 2006. 「遼代北方漢語方言的語音特徵」『中国語文』2006(6)
- . 2009. 「契丹小字韻文初探」『民族語文』2009(3)
- 豊田五郎〔著〕、那順烏日図〔訳〕. 1991. 「關於契丹小字的幾点探索」『内蒙古社会科学』1991(3)

【英文】

- KARLGREN, Bernhard. 1954. "Compendium of phonetics in Ancient and Archaic Chinese," *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities* 26
- SHEN Zhongwei. 2007. "Sino-Khitian Phonology," *Bulletin of Chinese Linguistics* 1(2)
- (おおたけ まさみ/京都大学大学院文学研究科・日本学術振興会特別研究員 DC)